

全学研修会 報告

「研究へのアジェンダ

～“生きる”を支える看護学への示唆～」

あけぼの会は治癒後も在籍し続ける方や、熱心に街頭での啓発活動に取り組んでいる方等、積極的な会員が多いのが特徴です。会員は乳がんの体験者なので、患者の悩みに対する相談員や啓発運動の生きたテキストとしての役割も担っています。

あけぼの会では会員同士のサポートだけではなく、社会に対しても貢献するために会員が体験者としてメッセージを発信しています。活動の一つである母の日キャンペーン活動は、乳がんの早期発見と自己検診を呼びかけるもので、私が乳がんで母親を亡くした子どもと会った時に、のこされた子どもに寂しい思いをさせてはいけないと強く感じたことを契機にスタートしました。乳がんは早期発見が重要で、その為には月1回の自己検診、年に1回の病院での検診が欠かせません。しかし、乳がん検診率はあがっていないのが現状です。自分でみつけられる病気を見送って死んでしまうのは本当に勿体ない事です。皆さんも是非検診を受けて下さい。

また、乳がん予防月間には、①治療中の方に愛と勇気をおくる、②亡くなった方を忘れない、③早期発見の重要性を知ってもらうためにという願いを込めて東京タワーをピンクにライトアップしています。乳がん患者にとって、乳がんとは突然降って湧く試練です。何故私なのか、辛い治療や高い医療費、家族への負い目、孤独感等、時には人生への敗北感を感じてしまう程のショックを受けてしまいます。特に①については、そういった方に手術前と同じように生きて欲しい、名誉や自尊心を守って欲しいという思いが込められています。



信念、情熱、

インテリジェンス、

そして人間愛



女性研究者の研究促進にむけ
研修会を連続で行っています。

常に新しい事を考えてすぐに実行に移す行動力

ポジティブシンキングでまずやる事が大切

同時に患者団体は医療関係者との連携も重要です。医療関係者に患者に対する人間愛が不可欠なのは勿論なのですが、患者にとっても医療関係者は病気を治し、自らを生かしてくれる存在です。お互いに敬い合ってこそ病気の治癒に取り組めるので、会では医療関係者からの信頼も得られるように努めています。

あけぼの会は面識のない患者同士が、繋がりという掛け替えのない財産を得る事ができる組織であり、乳がんによって傷ついた方にこそ来て欲しいと願っています。女性の社会進出が今ほど進んでなかったの30年前設立当時には、乳がん患者が街中で啓発運動をするという発想自体がありませんでした。それを可能にし、現在も会が存続している理由は、まず私のモットーでもある、常に新しい事を考えてすぐに実行に移す行動力が挙げられます。最初に駄目な場合を考えるのではなく、ポジティブシンキングでまずやる事が大切です。人間の人生は縛られたものではありません。会員が自分自身の人生を生きる手助けができればと考えています。同時に、支援してくれる人との信頼関係も欠かせません。お互いを尊敬しあい、大勢の方が後押しをして下さいました。次に、日々増え続ける乳がん患者や、会員を支える為にはやめられないという使命感があります。やってみなくては分からないと懸命に活動に取り組む私の姿を見て、会員達はついてきてくれました。これからは会員それぞれが独立して会を支えていってくれる事を期待しています。また、ある新聞記者に「女性の始めたものは当初の目的を見失い、長続きしない。」と言われた事も大きいです。厳しい指摘であると同時に、得難いアドバイスでもある言葉をかけられ、そうはすまいと意志を強く持つ事ができました。個人的にはこの会は日本の女性会史に残るものになったのではないかと感じています。

この様にあけぼの会の設立、維持は強い情熱に支えられてきました。活動は大変苦しいものではありませんが、同時に私の人生を豊かにしてくれました。純粋に打ち込める天職であったように感じています。

ワット 隆子 氏

【あけぼの会会長】

自らの体験を生かして、乳がん体験者の全国的なセルフ・ヘルプグループ「あけぼの会」を組織。30年間代表として活躍。女性主体の患者会として、さまざまなソーシャルアクションを展開してきた。

会長として、乳がん早期発見の啓蒙のために乳がん月間、母の日キャンペーンなどを毎年、実施。機関紙『曙』、AKEBONONEWSなど印刷物の発行。ABCSS病医院訪問ボランティアなど積極的な活動を展開している。

2006年8月現在の会員数
4,350名、40支部、顧問医70名。

主な受賞

1987年エイボン女性教育賞

1988年保健文化賞

2000年テレサ・ラッサー賞